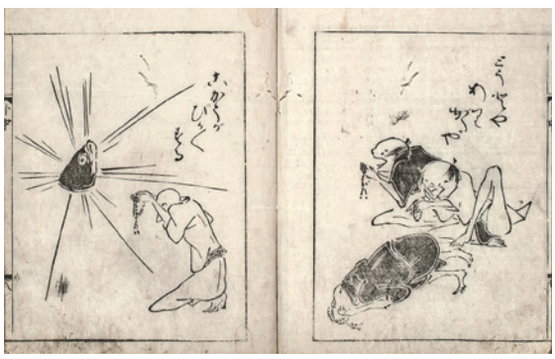
江戸の戯画 ―鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで

2018年4月17日（火）― 6月10日（日）



①

②

④

③

太平の世が長く続いた江戸時代には、多くの戯画が描かれました。一口に戯画といっても多種多様なものがありますが、本展では「鳥羽絵」をキーワードに江戸時代の戯画をご紹介します。

滑稽な人物を軽妙な筆致で描いた鳥羽絵は、18世紀の大坂で鳥羽絵本として出版され人気を博しました。その人気は近代にまで及んだと考えられています。また、大坂に留まらず、江戸の浮世絵などにも影響を与えています。鳥羽絵を洗練させたとされる大坂の「耳鳥斎」はもちろんですが、鳥羽絵本の影響を受けたと考えられる江戸の「北斎」や「国芳」、そしてその流れをくむ「暁斎」など、時代や地域により変化しながらも、鳥羽絵に見られる笑いの感覚は脈々と受け継がれています。

例えば、鳥羽絵本のうちの一つ『軽筆鳥羽車』には、魚の頭を拝む人々を描いた図（写真①）があります。おそらく、「鰯の頭も信心から」という諺を絵画化したものなのでしょう。数珠を持った男たちが魚の頭をうやうやしく拝む姿が滑稽です。これとそっくりの図を北斎も描いています（写真②）。多少の違いはありますが、北斎が『軽筆鳥羽車』を参考にしていることは明らかです。大坂で出された鳥羽絵本が、90年ほど後に江戸の浮世絵師である北斎に影響を与えているのです。

このように鳥羽絵からの流れを追うことが本展の目的の一つではありますが、それと同時に人気絵師たちが描いた楽しく優れた戯画も存分に堪能していただきたいと考えています。なかでも、戯画の名手として知られる国芳の浮世絵は見どころの一つです。本展では、擬人化された金魚の仕草が愛らしい「金魚づくし」シリーズ9図が世界で初めて勢揃いします（写真③）。全てが揃うのは、前期（4月17日～5月13日）だけですのでぜひお見逃しなく。

その他、18世紀後半の大坂で活躍した耳鳥斎や、幕末から明治に掛けて活躍した暁斎（写真④）など、人気絵師たちによる約280件の戯画を通して江戸の笑いの世界をご紹介します。笑いを文化として培ってきた大阪の地で、多彩な戯画の世界をぜひお楽しみください。

（秋田達也）

①『軽筆鳥羽車』　千葉市美術館
② 葛飾北斎「鳥羽絵集会　魚頭観音」　ベルギー王立美術歴史博物館
③ 歌川国芳「きん魚づくし　ぽんぽん」　個人蔵
④ 河鍋暁斎「風流蛙大合戦之図」　河鍋暁斎記念美術館　※5/29－6/10 展示